

## 国家に尽くした外交官ラファエッレ・ガリツリア(2a)

——その生き立ち、人となり、史料を中心とした考察

## 楠 田 直 樹

4. 駐マドリッド大使、そしてエチオピア征服の主人公、1932年から1936年  
ロンドンから出発する前に、グランディは同僚たちに、部局の中で出ていく  
ことを由としていた人々も交替させなければならせないのかどうかを尋ねる可  
能性を探っていました。そこで、確かに魅惑的で、文化的関心を満足させる駐  
マドリッド大使を選択しました。ともかく、彼は大臣職を辞して、もうイタリ  
アの対外政策を指揮する重要ポストには坐していなかったけれども、大使とし  
てイタリアの対外政策の代表であったことは紛れもない事実です。しかしなが  
ら、この政策に関する限り実質的には、以前の対外政策担当能力と比べて、彼  
が満足できるものではありませんでした。これはいづれにしても、ムッソリー  
ニがその両脇にドイツに対する政策決定について穏健ではあるけれども、共感  
の持てない人物を登用していたことによっていました。すなわち、その二人の  
人物は、秘書官のフルヴィオ・スヴィッチ Fulvio Suvich と内閣官房長のポン  
ペーオ・アロイージ Pompeo Aloisi でした。

イタリアにとって、サルデーニャはフランス、ドイツ、イギリス、エチオ  
ピアと比べるとさほど重要な位置を占めているとは言い難い地方でした。しか  
し、王国没落後、そして1930年まで思想的にはファシストに近づいていたブリー  
モ・デ・リヴェーラ Primo de Rivera 体制になるまでは、良好な関係を維持し  
なければならない相手でした。ガリツリアは出発前に、空軍大臣バルボによ

って、共和国に対する失敗に帰した陰謀に関して若干の情報を与えられていました。だから、この新大使ガエリツリアは、イタリアが取り立てて思想政策を実行しない共和国政府を確信し、その結果マドリッド政府がフランスに近づきすぎないように監視しなければなりませんでした。ルッジエーロ・モスカーティ Ruggero Moscatiによれば、彼のスペインにおける使命について省庁の体制はガエリツリア自身に委ねられており、彼の重要性がそれを示していたように推測しています<sup>49)</sup>。彼は、大使として、新たなファランヘ主義的な運動に参画し、ムッソリーニとは異なった役割を見越していました。彼はスペイン語習得に楽しみを覚え、立派な外交官として、万民と友好関係を築き、イタリア以外の第二の故郷としてスペインで充実した生活を送っていました。1935年に、罹病し、1月4日に父アルフォンソが亡くなった一ヶ月後の2月12日に妻が亡くなりました。それでイタリアに戻り、ナポリの家を引き払い、故郷ライトに引っ越しました。深く内面的に苦痛を背負った時期でした。そして研究生活のために外交官職を辞することを考えた時期でもありました。しかし、ムッソリーニがエチオピア担当の特別職の長に戻るように彼に要請したときに、それを拒絶することはできませんでした。事実、ムッソリーニはヨーロッパ列強の支持のもと、エチオピア獲得をすでに決定していました。1935年1月、ラヴァール Laval との協定で、フランスの同意を獲得したと確信していました。ガエリツリアは、しかしながら、イギリスがそこに巻き込まれていないことに一抹の不安を隠しきれませんでした。4月13日に、ストレーサ Stresa で、ムッソリーニと英仏首脳との会談が開催されました。しかし、そこではオーストリアの自治防衛とドイツの隔離を限定的にするために、アビシニアについて何も話されることはありませんでした。1936年6月18日に英独海軍協定の調印で、イギリスとすぐに戦闘状態に入ることなく、伊仏の知らない間にヴェルサイユ条約を揺さぶって、ドイツにイギリスの35%まで、そして潜水艦建造では同等レベルまで海軍を建造させる可能性を与えてしまいました。それで、カンパーニア出自の外交官ガエリツリアは、エチオピアにはっきりと好意的であったイーデン Anthony Eden 政府の要求を不忠実なものに見做し、この点でムッソリーニ

と妥協することになりました<sup>50</sup>。

実際、彼はムッソリーニやスヴィッチ、アロイージとの十分な合意の中で、イタリアの政治に貢献しただけでなく、最良の関係を築いたスヴィッチと若干の直接的合意に至ったことを書き記していました。事実1935年5月に、ムッソリーニはイタリアの手にエチオピアをなすがままにされるのをよしとしていなかったイギリスに対する態度を鮮明にしました。その理由は、イギリスが国際連盟の成員であったこと、そしてイギリスの公式見解が国際連盟の再評価を求めているなかったこと、ムッソリーニをヒトラーよりも危険であり、なんら誠実な譲歩をする意図すら持ち合わせていないと考えていたイーデンによって私物化されていたイギリスの政治があったことだとされていました。それで、イギリスは、ムッソリーニがすぐに情報機関からの報告によって知ったように、地中海に艦隊を派遣していました。ただその艦隊はまだ戦闘態勢に入るようなものではありませんでした。ゲアリツリアはムッソリーニが1935年10月2日に宣告したエチオピアへの攻撃に好意的でした。イギリスの返答は、イタリアに対する国際同盟による経済的批准を求めさせるものでした。しかし、イタリア人が周知のように、その経済的批准というのは石油のような必需品にまで拡大されるものではありませんでした。ゲアリツリアのような外交専門家によれば、イギリスをして国際連盟の面目を施させ、イギリス世論にも面目を与えるような互惠機能を持たせることが可能でした。事実、アビシニアでの企業は、必要であっただけでなく、すぐに再生する必要のあった英伊間の友好関係を壊すことはできませんでした。ゲアリツリアは、だから、ホアレ・ラヴァル Hoare-Lavalのプラン、すなわち英仏首脳によって提供されていた12月11日の妥協案を好意的に見ていました。原則的に外務省によって実行され、エチオピアの自治を維持しようとしていたけれども、イタリアにアビシニア王国南部における領土的な拡大と経済的支配を与えていました。とりわけ、イタリアがドイツと結びつきの避けるべく、イタリアにイギリスとの対立を改組させようとしていました。ムッソリーニは、何らかの改善を望んでおり、そのような提案を受け入れる準備があり、ゲアリツリアは12月18日にファシズムの挙国一

致内閣が議論の基本としてその提案を考えていたことを確言するために、ある種の伝達を準備する責務を与えられていました<sup>51)</sup>。しかし、この伝達はイタリアの新聞紙上には掲載されることはありませんでした。というのは、その夜に、同僚や内閣の支持基盤の甘さや公式見解の対案によってホアレ辞職の知らせが届いていたからにはほかなりません。その彼の立場に、反イタリアを掲げていたイーデンが後釜に座ることになりました。その一ヶ月後、ラヴァルもまた、辞職を余儀なくされ、その後釜にフランデンFlandinが座りました。ともかく、フランスはエチオピアにおける前進勝利を奪取していたイタリアとの批准拡大を模索し続けていました。ただ、ガリツリアは、国際連盟との冷え切った関係を避けるべく、あらゆる出来事に直面して差し当たり素早く完璧な軍事的勝利をすることだと考えていました<sup>52)</sup>。しかし、将来にわたって、資本に関して重要な出来事が二つ相次いで生じました。1936年1月6日、ラヴァル・ホアレ案の失敗とイギリスとの対比が先鋭化したのち、ムッソリーニはドイツ大使ウルリッヒ・フォン・ハッセルUlrich von Hassellと会談し、ドイツに直面してイタリア政策の変化とオーストリアがドイツとの協定を模索する意志を彼に伝えていました。その二ヶ月後、3月7日に、ヒトラーはヴェルサイユ条約だけでなくロカルノ条約をも破棄して、これらの条約によって非軍事化されたままになっていたラインランドを軍事占拠しました。そのときに、ドイツはまだ非武装化されたままで、フランスの反応ですぐに撤退することを余儀なくされていた時でした。しかし、フランスは慢性的な内政危機を抱え、効果的な防衛に限界があり、イーデンはイタリアに反対する決定を下していたにもかかわらず、ヒトラーには反旗を翻すことは望んでいませんでした<sup>53)</sup>。

イタリアのアビシニア遠征は凱旋勝利そのもので、5月5日には、イタリア軍はアデイス・アベバを占領しました。その4日後、ムッソリーニはイタリア帝国を公言しました。ガリツリアはローマのヴェネツィア広場で、ムッソリーニが5日の夕刻に行なった勝利宣言を聞いていた20万人の聴衆の中にいました。イタリアの外交にとって、共和国誕生以後のイタリアに数えられる業績の中でも群を抜くものでした。その功績は全てムッソリーニに帰されるものでし

た。しかし、ゲアリツリアはすぐにイギリスとの関係改善に向けて基本的な考えを導き出そうとしていました<sup>54)</sup>。つまり、もしストレーサの協定にまで戻る事ができないのであれば、ロカルノの条項にまではなんとしても戻らなければならないと考えていました<sup>55)</sup>。

## 5. 第一次世界大戦直前直後、1936年から1940年

ムッソリーニは、エティオピアでの勝利ののち、イタリアの伝統的な政策に戻る意志を公言したけれども、イギリスにイタリア帝国の認知を求めて、重大な帰着に至るであろう外務省に重要な修正を実施していました。1936年6月9日に、事実ムッソリーニは外務大臣に、青年で専門家ではなかった才能のあるガレアツォ・チアーノ Galeazzo Ciano を任命しました。すでに彼は出版物兼宣伝大臣であり、ヒトラーのドイツに接近する政策を推進していた人物であり、彼のもつ親ドイツ的な熱情の基本的要因がグランディ的政策をさらに遠ざけていく以上に、スヴィッチやその同僚たちを罷免するという方向性を余儀なくするものでした。実際、スヴィッチは、ムッソリーニに対してゲアリツリアとその考えを分かち合っていた回想録の中で、ひとたびオーストリアを確保したならば、ドイツの世界が拡大を止めるであろうと見た100キロ先の距離であったトリエステ Trieste の再征服に考えを及ぼさないであろうと考えるのは間違いであるというふうに記しながら、オーストリアの放棄に対して、最終通告をするところまで来ていました<sup>56)</sup>。

ゲアリツリアは、5月14日の日付で、イギリスとの暗黙のうちの了解へ回歸する必要性を本源的に確信して、覚書を書き記していました<sup>57)</sup>。そのドイツとの関係強化という観点は、まさしくチアーノが意図していたところでした。それに暗に反旗を翻すような格好になりました。そのような状況の中で、ゲアリツリアは自ら外務省業務から解放されることを望み、エティオピア問題に一定の解決策を見出し、外務省から新たなポストへの転出を求めました。それで、彼はプエノスアイレスに赴任することになりました。その地は大国の首都ではありませんでしたが、イタリアの政策の根本的な課題からは遠く二義的なものでしか

ありませんでした。そのときには、彼は個人的な人生としてはかなり幸せな時期であったといえます。その数カ月のちの1936年9月7日には故郷ライトで結婚することになったブラドアメーノPradoamenoの女侯爵でスペイン貴族の女性パス・マッツorra・イ・ラメーロPaz Mazzorra y Rameroと婚約していました。その婚約はまさしくフランコ総統によるスペイン内乱の勃発が近づいていたからにほかなりませんでした。フランコとは彼らの共通の友人アルマザンAlmazanの公爵がいました。この侯爵はイタリアの支持やフランコへの援助に好意的でした<sup>58)</sup>。彼がブエノスアイレスに出発する際に、ムッソリーニからアルゼンチンのイタリア人の中にある、かなり冷徹になってしまっ、エチオピア問題に関しても何ら特別な感情を抱いていなかったイタリア人的感情を喚起するように使命を与えられていました。その一方、アルゼンチンは国際連盟でも批准に投票していましたが、1938年のイギリスの認識ののちのみイタリア帝国を認識するというものでした。ガエリッリアは、その当時の愛国主義者や国粹主義者の立場から、平生の仕事と情熱でもってその達成に期するものがありました。しかし、当時のアルゼンチンは、「血の権利Ius sanguinis」ではなく、「土地の法Ius soli」の原則によっていたので、ほぼ完璧にイタリア起源の人々を同化することができました。イタリア移民はその当時実際的には、イタリア政府の政策に従属しながらも、それを中断していましたが、何ら特殊なファシスト的な組織もありませんでした。それで、彼がその報告の中の一つに書き記しているように、大部分の移民はイタリアではとりわけ幸せではなく、愛国的な精神が育まれるような状況にはありませんでした。さらに若干の場合には、イタリア的權威をあまりよく見ていなかった人々さえも関係を保てるようになっていきました<sup>59)</sup>。

1938年3月に、ガエリッリアは、アルゼンチン政府の催促にもかかわらず、新たに移民に好意的にその政策を転換することがイタリアにとって好都合だとはいえませんでした<sup>60)</sup>。ともかく、彼はいつものようにアルゼンチンでの生活の中で重要だと思われる人物との交友を深め、イタリアに南米の大国の一つであるアルゼンチン当地での正確で有益な報告を送っていきました。アルゼンチ

ンの政治勢力の間では、国家主義者と保守主義者がイタリアのファシスト政権に好意的であったのに対して、急進主義者や極左主義者は反ファシストであり、イタリア出身で二重国籍を保持していたイタロ・アルゼンチン人の間に、この二つの政治的な流れが混在していました。教皇ピオ11世の回勅を *Mit brennender Sorge* (焦げつきる憂慮で) という「称号」を与えていたドイツでナチス政権の反宗教政策へのアルゼンチンのカトリック社会の反応を引用しながら、ナチズムに関する見解がいずれであるのかを理解させるのに不足はありませんでした<sup>61)</sup>。1938年9月のミュンヘン会議の前日にはイタリアに帰国し、チアーノがドイツに対する分別ある政策を維持していなかったこと、そしてイタリアがかなり満足した国家として道理を弁えた政策を展開していないように思われたこと、さらにエチオピアでの衝突ののち継承していかなければならなかった政策を捨ててしまっていたことを見抜きました。イタロ・バルボ *Italo Balbo* はヨーロッパ列強の衝突に当たって軍備の準備不足を情報として彼に与えていました。それに反して、ムッソリーニは、戦争に駆り立てる準備を整えようとしていたヒトラーのように独裁者になろうとしていました。そしてときおり彼の論議はヒトラーの論議と同じく好戦的なものになっていきました<sup>62)</sup>。

その後、ムッソリーニの仲介があつて、同盟国は譲歩し、9月28日にミュンヘンでヒトラーの要請に応じて同意しました。このときムッソリーニは和平の救済者のように思いましたが、ガリツリアはファシズムの長がヒトラーの利害のためにイタリアをもてあそんでいるのではないかと考えて、憂慮していました<sup>63)</sup>。いずれにしても、彼はイタリア政治の流れを変えるべく職責に留まることを考え、在パリ大使になることを受諾しました。その職はスペイン内乱やフランスでの人民戦線の勝利のおかげで、報告をあげることが非常に難しかった2年の間空席になっていました。しかし、人民戦線政府が1938年4月に倒れたために、かなり好意的な報告を与えられる段階に入っていたのではないかと思います。チアーノにしろムッソリーニにしろ、ガリツリアをしてイタリア外交政治の中心人物にしようとする意図は全くもっていませんでした。つまり、彼をしてその人物像を利用しようとしていただけでした。彼はフランス

人に受けがよく、イタリア政治の闇の部分完璧に覆うことのできる人物だと見做していたにすぎません。だから、ムッソリーニは彼を受け入れることに反対していましたが、チアーノは彼を登用しても何も大きな変化はないと踏んでいました<sup>64</sup>。そのせいか、彼の仕事はすぐに困難を極めるようになりました。つまり、11月30日にローマでファシズム政府とイタリア労働組合の反フランス・デモが起きました。そのときイタリアの議員たちは、チアーノの演説の最中、彼が「イタリア人民の自然的な鼓舞」について語った<sup>65</sup>際に、チュニジア、コルシカ、ニース、サヴォイア、ジブチの雄叫びが湧き溢れていきました。そのデモはフランスの大使アンドレ・フランソワ・ポンセ André François-Poncet がイタリアに着任した直後のものでしたし、ガエリッリアがフランス大統領に拝謁するという前日のことでした。彼はその翌日友好関係にあったフランス人の労働大臣アナトール・ドゥ・モンツイ Anatole de Monzie からその仔細を聞き及ぶことになりました。ガエリッリアは、このように暗雲立ち込める状況で出発しながらも、フランスとの関係改善に尽力しつつ、ムッソリーニにフランス政府に対して有効な政策を説明しようとしていました<sup>66</sup>。そのために、彼はイタリアに対して好意的で、なかつ偏見的な敵愾心をもたない人物たち、例えばドゥ・モンツイやラヴァル、フランダンなどのような人々のもとに頻繁に出入りしていました。そのような要人との関係性の中から、ムッソリーニやチアーノに、フランスが想像しているほどの決定的な勢力ではないことを理解させようとしたのですが、彼らはコルシカ、ニース、サヴォイアに関するイタリアの愚かな口実が世論を動かす力になるのではないかと、まだ抵抗勢力として大きな力を秘めているのではないかと考えられていました<sup>67</sup>。ガエリッリアはさらに、ドイツの不実、とりわけ外務大臣リッベトロップ Ribbentrop のそれを確信させようとした。このドイツ外相は12月6日に、二国間国境画定の独仏宣言署名のために来仏していました<sup>68</sup>。いずれにしても、ガエリッリアの行動はムッソリーニを翻意させることにはなりません。すでに、ムッソリーニはチアーノに3月3日の時点でかなりの不満を表明していました<sup>69</sup>。在パリ・イタリア大使として、自らの外交手腕から、その外交文



書の中に、恐らく手段として、熱心なファシストだと思わせるような文言を挿入していました<sup>70)</sup>。彼は実際、ユダヤ人排斥主義者ではなかったし、過去においては植民地問題や東方問題のための第五課の責任者でした。そのさいには、ユダヤ人の好意をイギリス人たちに残さないためにもいかなる偏見もなくシオニズム運動に追従していました。だから、彼のとった主導的な行動に関して、イタリアの親シオニズム主義者の社会をも構築することになりました。

そのような関係性の中で、彼は組合運動を、フランス左翼をも激しく批難していました<sup>71)</sup>。そしてまた、彼は、民主主義者でヨーロッパのキリスト教民主主義を支持していたパリ大司教の枢機卿ヴェルディエVerdierによれば、熱心なカトリック信者でした<sup>72)</sup>。彼の批判は、ルーズヴェルト大統領の親友で在モスクワ大使を歴任していたアメリカ大使ウィリアム・ビュリットWilliam Bullittには信義深いものでした<sup>73)</sup>。このビュリットは、アメリカ合衆国がその当時独伊を援助する何らかの可能性を残していなかったにもかかわらず、フランスをして、独伊に対する戦争を押しかけていました。フランスの外交官レオン・ノエルLeon Noelに当惑を残したビュリットの古典的な外交戦術に対して、ガリツリアは、彼のとった行動に大いに困惑しました。ビュリットはすでに1937年からルーズヴェルトに派遣されており、二人の独裁者に対して戦争を仕掛ける必要があり、いっしょに没落させなければならないと語っていました。それに反して、ノエルは、ムッソリーニはヒトラーとは異なり、あらゆる方法でヒトラーと分断させることが大事であると考えていました<sup>74)</sup>。

5月22日、当然ガリツリアが知らぬ間に独伊鉄鋼協定が締結されました。この協定は、同盟関係*casus foederis*が防衛戦争に限らず、両国のうちのどちらかが攻撃を実行する戦争の場合にも素早く行動するという条件で、この両国間に揺るぎない結びつきになったように思えます。実際、ムッソリーニは、イタリアにとって1943年以前に戦争に突入することが不可能だったということを理解させたことで、少なくとも三年という期間を稼いだと考えていました。しかし、ヒトラーはその署名の翌日にはポーランド侵攻の準備をするように配下の将軍たちに命じていました<sup>75)</sup>。そう見てくると、この協定の軽重という点か

ら、ムッソリーニにしろ、チアーノにしろ、また在ベルリン大使ベルナルド・アットリコBernardo Attolicoにしろ、軽くあしらわれていたにすぎないことを物語っています<sup>76)</sup>。8月13日にザルツブルグでリップントロップとヒトラーがポーランド侵攻の撤回不可能な決定を伝えたときに、チアーノは大いなる自らの過ちに気がつきました。ファシスト政府の見通しの甘さとともに、ゲアリッリアの卓越した外交戦術が大きなコントラストになって見えてきます。時の政府に取り込まれることなく、自らの外交信条を、針の穴に糸を通すような気持で、陳述していこうとしていたことが窺い知れます。いずれにしても、彼の努力も時代の流れの中で水泡に帰してしまったことは事実です。それに対して、チアーノの考えは反対になってしまったにもかかわらず、確かに英仏が努力する中でポーランド防衛の戦争に突入しましたが、たとえその努力が実っていたとしても、そのときにこの両国に対抗する方がよかったのではないのでしょうか。チアーノは裏切られたという思いから帰国し、イタリアをドイツとの同盟から分断しようとする決意を胸に秘めていました。しかし、ムッソリーニはイタリアが戦争準備に怠りがないと確信していましたが、まだ不確定要素が多く横たわっていました<sup>77)</sup>。

その時以来、ゲアリッリアは、イタリア外交政策行動についての情報を与えられることがなかったけれども、少なくとも外務省との同調を目指していました。ドイツとポーランドとの間で戦争ないかたちでの衝突を解決すべく外交手段に訴えようとしつつ、イタリアとフランスとの和解、イタリアの戦争介入阻止に尽力しました。彼は、ポーランド人がドイツの攻撃に対して防衛できるだけの状況にはなかったことに確信をもっていました。それで、彼は、ムッソリーニによって最後の瞬間になされた調停の試みを支えようとし、フランスの友人たちからの情報を求めていました。ムッソリーニは、ドイツの軍団の前進を止めるヨーロッパ列強間の他の会議を提案しました。しかし、英仏は占領地域からの撤退をまずしなければならぬということを正当に宣言しました。ただ、フランスは、イタリアの大使によって押されていたのだが、ドイツ軍団の象徴的な撤退だけでは満足していませんでした。ゲアリッリアは、イギリスがフラ

ンスをして戦争に引きずり込もうとしていたのではないかと考えていました<sup>78)</sup>。

ゲアリッリアは、仏伊接近の可能性に期待を寄せていました。もしイタリアがドイツの立場を共有しないならば、同様に英仏間の価値領有を考慮された戦争への危機を求めることを前提にしていました。なかんずく、ゲアリッリアは、ドゥ・モンツィ大臣といっしょに、仏伊間の商業交流の増加の擁護者でした。

チアーノによっていつも暗雲が立ち込めていましたが、在ロンドン大使ジュゼッペ・バステアニーニGiuseppe Bastianiniとの個人的連携を強化していました。彼もまた、介入に反対の立場を貫いていましたが、衝突へのイタリアの介入を避けるべく全力を尽くして、ローマに情報を送っていました。

イタリア外交史研究の師匠であるマリオ・トスカーノMario Toscanoは、ゲアリッリアの文書や第二次世界大戦勃発後のイタリアの外交文書に関して、次のように記しています。「和平に関するさまざまな試み、ポーランドでの出来事によって引き起こされた反応そして独露協同、列強諸政府の進化、そして根底に戦争への序奏を感じ取っていた強固な非妥協的な態度に関する世論の具体的な表明によって生じた反応は、アッティリコ、ロッソRosso、ゲアリッリアや他の指導者たちの公文書を通しての特有の活気をもって続いており、あたかも無知な出来事を暴露できなかったとしても、出来事や心理的側面の最良の把握力に明らかに貢献していた」と述べています<sup>79)</sup>。

ゲアリッリアの無数の意義深い報告の中で、とりわけ重要なものは、2月24日のものです。その中で、仏伊間の疑問を正常化すべく対話を重ねようというフランスの提案を、非交戦状態のまま、中立性を宣言しつつ、イタリアが受諾するように道理をもって表現していました。彼はそこに、衝突の際の可能な限りの結果、すなわちドイツの勝利、英仏の勝利、妥協的な和平というような結果について述べていました<sup>80)</sup>。彼の並々ならぬフランスに対する思い入れというよりもむしろ反戦和平の考え方が色濃く感じられるところです。しかし、イタリアをして、彼の思う方向にもっていくことに大きな矛盾を抱えていたことも事実です。そのギャップを埋めるべく、身を粉にして闘ったにもかかわらず

ず、彼の思う結果に行きつくことがなかったところに、彼の悲劇性が出ているような気がします。

また、彼はともに反戦派であった教皇や国王の行動に一縷の望みを抱いていました。そのために、ローマで1939年12月28日、教皇ピオ12世と国王と歴史的な謁見の手助けをしていました。しかし、ドイツの勝利は、ムッソリーニをして戦争へと大きく舵をとらせてしまいました。最後の最後まで、ガエリッリアは、衝突に突入するのを避けるべく、フランスがイタリアに価値ある申し出をすることを提案させようとしていました。というのも、彼はフランスがドイツの支配下に置かれていた国境付近の領土を穏健にイタリアに占有させる意図をもっているだろうと考えていたからにはほかなりません。しかしながら、彼や友人のドゥ・モンツィの努力の甲斐もなく、フランス政府は、イタリアの戦争介入を避けたいと宣言しながらも、具体的な申し出を一切しませんでした<sup>81)</sup>。

## 6. その後1943年まで

1940年6月10日宣戦布告がなされたことで、彼のフランスにおける使命が終わりを告げ、1940年10月にムッソリーニの命令一過、イタリアがギリシアへの不運の攻撃に威厳を添えていました。そして1942年2月までその責務に留まることはありませんでした。それはまさしく彼がベルナルド・アットリコの亡き後ヴァチカンのイタリア大使に任命された時でした。この任務のゆえに、彼は宗教心の厚い感情にしろ、1923年にスイスで知り合ったヴァチカンの枢機卿ルイジ・マッリオネLuigi Maglioneとの友人関係を考慮していたにしろ、決定的に適任者でした。知己になったとき、マッリオネは、ベルンで教皇大使であり、ガエリッリアはローザンヌ会議のイタリア代表でした。その時以来、彼らの関係は保たれ続けていました。戦争が世界戦になり、イタリアはその恩恵を蒙ることはなく、アフリカではイギリスに敗れ、海上ではムッソリーニの皮相的な攻撃を受けたギリシアに一敗地にまみれました。ガエリッリアはすでに以前よりこのような悲惨な状況を予測していました。ドイツはこのイタリアの状況を見て、イタリア自立の大損害から立ち直らせる行動に出ました<sup>82)</sup>。

1941年6月22日、ヒトラーはソ連の攻撃を開始し、電光石火の戦いであることを信じていましたが、広大な領土を支配下に収めたにもかかわらず、ソ連をねじ伏せることはできませんでした。1941年12月7日、アメリカ合衆国も日本の真珠湾奇襲攻撃ののち参戦することになりました。ムッソリーニはこの米ソ両超大国にも宣戦布告することを考えていました。グアリツリアとマツリオーネは、イタリアの命運に憂慮しており、国王の権威が強化されることを望んでいました<sup>83)</sup>。(続く)

註

- 49) Cf. Guariglia, *Primi Passi in Diplomazia e Rapporti dall'Ambasciata di Madrid*, Moscati, R., ed., Napoli, 1971, pag. 187.
- 50) *Appunto delle conversazioni tra Guariglia e Suvich*, Roma, 24/6/1935, in DDI, Serie VIII, I, D.432.
- 51) Guariglia, *Ricordi 1922-1946*, Napoli, 1949, pp.296-297. [ed. francese: *La diplomatie difficile. Mémoires 1922-1946*, Paris, 1955.]
- 52) Scarano, F., *Raffaiele Guariglia, l'uomo e il diplomatico al servizio dello Stato*, Salerno, n.d., pag. 41.
- 53) イーデンの政策に関する批判については、De Felice, *Mussolini il duce*, vol. I, Torino, 1974, pp. 668 segg. そしてイギリスの立場については、Lamb, R., *Mussolini and the British* [I.T.: *Mussolini e gli inglesi*, Milano, 1998]を見よ。Cf. Scarano, loc. cit.
- 54) Scarano, op. cit., pag. 41.
- 55) Guariglia, op. cit., pag. 323: cioè a metterci nuovamente al fianco dell'Inghilterra al di sopra della mischia in qualità di arbitri e non di parti nei conflitti europei. というふうに述懐している。
- 56) Scarano, op. cit., pag. 49.
- 57) すなわち、Scarano, loc. cit.: era anche favorevole a buone relazioni, ma non ad un'alleanza con la Germania e in questo senso avvertì il nuovo ministro degli Esteri di non andare troppo Avanti nei rapporti con Berlino. というふうに、ドイツとの関係の進捗に憂慮の念を禁じえない。
- 58) Scarano, loc. cit. には、その一つの理由として、"anche perché, incontrando la sua fidanzata alla frontiera franco-spagnola, si era reso conto degli aiuti che affluivano dalla Francia ai repubblicani." としている。

- 59) Guariglia a MAE, Buenos Aires, 13/ 1 /1938, Moscati, Scritti <Storico-Eruditi> e Documenti Diplomatici (1936-1940), Napoli, 1981, pagg.231- 2 .
- 60) Idem., 14/ 3 /1938, pag.240.
- 61) Guariglia a MAE, Buenos Aires, 24/ 4 /1937, Moscati, op.cit., pagg.210-211.
- 62) Scarano, op.cit., pag.50: Si era allora all'apice della crisi dei Sudeti, quando sembrava che la volontà di Hitler di occupare immediatamente questi territori della Cecoslovacchia, abitati in maggioranza da tedeschi, portasse alla guerra.というふうな状況になっていた。
- 63) Scarano, idem.: …della Germania di Hitler, al quale riteneva si fosse legato perché convinto dell'ineluttabilità di una Guerra e della vittoria tedesca.と見做していた。
- 64) Guariglia, Ricordi 1922-1946, Napoli, 1949, pag.357. また, Ciano,G., Diario 1937-1943, ed.De Felice,R., Milano, 1990, pag.210には, [Guariglia era] un funzionario furbo, che legherà l'asino dove vorrà il padrone, ma lo farà a malincuore perché è un democratico e quindi, nel fondo, francofilo.というふうに, 叙述されている。すなわち, 人物として利用されていたことが窺い知れる。
- 65) De Felice, Mussolini il duce. Lo Stato totalitario 1936-1940, Torino, 1996, pag.557に見えるチャーノの演説に見られる。
- 66) Guariglia a Ciano, Parigi, 3 /3/39, ASMAE, Carte Guariglia, b. 1 fasc.Francia 1939. “Per esempio a marzo segnalava come al minister degli Esteri francese si sarebbe coltivata la possibilità di fare concessioni in material colonial e di cedere Gibuti.”というふうな提案をしている。これからも彼のフランスにかける意気込みが見て取れる。そのための譲歩すら厭わない姿勢が出ている。
- 67) そのうえに, 例えばヴェネツィアに関しての問題も含めて, Guariglia a Ciano, Parigi, 24/12/1938, ivi. また, Guariglia, Ricordi cit., Lettera personale di Guariglia a Ciano, Parigi, 8 /12/1938, pagg.375-377; idem, Scritti cit., pagg.256-257; Minuta in ASMAE, Carte Guariglia, b. 1 , fasc. Francia 1939.を参照せよ。
- 68) 上述の註 (67) を参照せよ。ともかく, “l'esuberanza di un popolo giovanile”[青年の活性化]として, その問題を規定しようとしている。
- 69) Ciano, op.cit., pag.260.
- 70) Guariglia a Ciano, Parigi, 3 / 6 /1939, ASMAE, Carte Guariglia, b. 1 fasc.Francia 1939やその他さまざまなAffari Politici Francia 1931-1945, b.40, 1939の文書に見られる。例えば, “in particolare espressioni contro gli ebrei, identificati come i principali artefici dell'antifascismo in Francia, che ricorrono spesso nei suoi rapporti.”というふうに記載されている。
- 71) Guariglia a Ciano, Parigi, 22/ 2 /1939, Guariglia, Scritti cit., pagg.272-273. その文言の原

- 典は, ASMAE, Affari Politici Francia, b.40, 1939.の中に見られる。
- 72) Guariglia a Ciano, Parigi, 21/ 1 /1939, ASMAE, Carte Guariglia, b. 1 , fasc. Francia 1939; Affari Politici Francia 1931-1945, b.40, 1939.
- 73) Cf. Guariglia a Ciano, Parigi, 15 maggio 1939, ASMAE, Carte Guariglia, b. 1 , fasc. Francia 1939.
- 74) Noël,L., Les illusions de Stresa. L'Italie abandonnée a Hitler, Paris, 1975, pag.163.
- 75) 例えば, Toscano,M., Le origini del patto d'Acciaio, Firenze, 1948.
- 76) 例えば, Pietro Pastorelliの論考などに顕著に見られる。
- 77) Scarano, op.cit., pag.57: infatti temeva una caduta di prestigio se non avesse tenuto fede agli obblighi dell'alleanza anche se alla fine il buon senso avrebbe prevalso pur senza fargli denunziare l'alleanza con la Germania.というふう<sup>に</sup>に推察している。
- 78) Scarano, op.cit., pag.57: Guariglia poté con soddisfazione vedere che Mussolini aveva per il momento separato le sue sorti dalla Germania evitando di entrare in Guerra, sebbene il <duce> proclamando la non belligeranza continuava a dichiararsi alleato della Germania, ma era in realtà in attesa degli eventi.
- 79) Toscano,M., Storia dei trattati e politica internazionale, Torino, 2<sup>nd</sup> ed., pag.364.
- 80) Guariglia a Ciano, Parigi, 24/ 2 /1940, DDI; Guariglia, Scritti cit., pagg.371-372: Nel primo caso l'Italia dovrà cercare di farsi la sua parte in una pax germanica, ma poiché questa pax per essere imposta agli altri dovrà essere fondata sopra una complete schiacciante vittoria hitleriana, poco importerà alla Germania un intervento armato italiano dell'ultima o anche della penultima ora in soccorso del vincitore. Sarà dunque sempre in sede di organizzazione della pax germanica che l'Italia potrà intervenire, ed allora in che cosa un accord fatto ora con la Francia le potrà anzi essere per l'Italia un più avanzato punto di partenza. Se vinceranno invece gli alleati, è ovvio che l'aver regolato anticipatamente i suoi rapporti con loro non potrà essere per l'Italia che un vantaggio, sia per evitare di essere isolate, sia per chiedere, ove possibile, di più. Nel caso di una pace più o meno Bianca, tutte queste ragioni che militerebbero a favore della pronto conclusion di un accord con la Francia acquisterebbero di per sé maggior forza di evidenza.というのがその文言の全容である。いかに彼がフランスとの関係維持に全力を注いでいたのかが理解できるところである。そしてさらに, ドイツの不実さについて強調している。すなわち, “in quelle due o tre occasioni che la Germania ha avuto di mostrarsi leale con l'Italia, essa si è guardata bene dal farlo - l'occupazione di Praga, il patto con la Russia sovietica, la Guerra alla Polonia ecc.: Hitler non ha creduto fosse suo dovere o semplicemente suo interesse di consultare l'Italia prima di compiere tali atti politici ben più important e dib en più vasta

portata europea che un'eventuale accord italo-francese sulla soluzione di certe minori questioni. L'Italia, dato lo stato di Guerra attuale, potrebbe invece spingersi anche ad informare la Germania preventivamente di trattative dirette a raggiungere tale accord, e non si vede su qual base né morali, né giuridiche, né pratiche Berlino potrebbe negare a Roma il diritto di darvi seguito.”とまさに一刀両断である。

- 81) Guarigliaは、自らのこの特殊な試みを叙述しているが、それはDDIの中にある未発表のものも好感されたものも含めて、外交文書の中に確認されている。
- 82) とりわけ、ギリシアでのイタリア軍の状況に関しては、二つの映画が好一対をなしている。一つは、マッデン監督の『コレリ大尉のマンドリン』であり、今一つはサルバトーレス監督の『地中海』である。その当時のギリシア、エーゲ海でのイタリア軍の行動をイメージできる。
- 83) Scarano, op.cit., pag.59.